

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Yuzo Yamamoto, Bertolt Brecht and the judith of Shimoda

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Franz, Edgar メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1520

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



山本有三、ベルトルト・ブレヒトと下田のユディット

Edgar Franz

1. はじめに

小説家・戯曲家山本有三は、その作品及び、彼によるヨーロッパ文学作品の翻訳版は日本でよく知られている。ヨハンアウグスト・ストリンドベリ、アルトゥル・シュニッツラーやシュテファン・ツヴァイクの作品の山本による日本語訳は日本における西洋文学への理解に貢献した。けれども、山本がヨーロッパの文学にも影響を与えたということはそれほど知られていない。特に興味深い例となるのは、山本が1921年に発表した戯曲『女人哀詞—唐人お吉ものがたり』である。

以下、山本有三とベルトルト・ブレヒトが戯曲の中で『お吉』をどのように扱ったか、また山本がどれほどブレヒトの戯曲『下田のユディット』に影響を与えたのかを示す。この論文では、主にドイツ語で書かれている文献を参考にした。

2. 山本有三と彼の戯曲『女人哀詞—唐人お吉ものがたり』

最初に山本有三の生涯と作品について説明し、戯曲『女人哀詞—唐人お吉ものがたり』を紹介する。

2.1 山本有三の生涯と作品

山本有三は、1887年7月27日、裁縫用品店の息子として栃木県に生まれた。中学校を卒業後、山本は東京浅草の裁縫用品店に奉公に出された。1912年、彼は東京帝国大学独文科選科に入学した。大学卒業後の1917年、山本は早稲田大学で独語講師として勤め始めた（Shaw 1957 XV）。劇作家として初めて成功を収めた戯曲は『生命の冠』である。この戯曲は東京と大阪の評判の高い劇場で上演されたので彼は全国で知られるようになった（Shaw 1957:XVI）。山本の戯曲『生命の冠』（1920年）、『坂崎出羽守』（1922年）と『女人哀詞—唐人お吉ものがたり』（1929年）という三つの戯曲は早くも1935年、グレン・W・ショーにより英語訳された（Yamamoto 1935）。外国作家辞典の中でユールゲン・ベルントは山本有三を「近代の日本戯曲における最も重要な代表者の一人」だと称した（Neureuter 2007: 141）。

ヨーロッパとアメリカで山本は特に上述の三つの戯曲で知られるようになった。それらの戯曲は三部作と言われ、三段階で日本史を描いている。つまり、封建時代、過渡的な段階、そして近代の日本である。戯曲『生命の冠』の中で山本は19世紀の近代日本を扱っている。エビの缶詰をロンドンの商売人に売ることによって生計を立てる正直な日本人が物語のテーマになっている。彼は卸売業者を使わなかったので、その業者の妨害によって事業は衰退の一途を辿る。戯曲『坂崎出羽守』では、徳川時代初頭の日本の上層階級を扱っている (Shaw 1957: V)。徳川家康は1607年に大坂の陣で豊臣秀忠に勝利した結果、権力を強化した。これが、日本の約250年にも渡る鎖国時代の幕開けであった。戯曲『女人哀詞—唐人お吉ものがたり』はその二つの時代の狭間、つまり封建時代と近代の間の過渡的な段階が舞台になっている。

2.2 山本の戯曲『女人哀詞—唐人お吉ものがたり』

山本の戯曲『女人哀詞—唐人お吉ものがたり』は、1856年から1876年までの20年間は舞台になっている。この戯曲は、下田での犠牲的行動によって有名になった芸妓のお吉をテーマにしている。

アメリカの領事タウンセント・ハリスは最初に日米修好通商条約の交渉が成功を収めなかったため、下田を砲撃すると威嚇した。同時に、日本人の召使を宛がわれないことに不平を言った。

領事を宥めるため、下田の警視総監は芸妓お吉に領事の家で召使として働くことを強固に要求する。彼は、彼女に愛国主義的な行動を求めた。お吉の婚約者鶴松は、彼女を説得するために買収された。当初、お吉は強固に拒絶したが、最終的に故郷下田を救うため承諾した。彼女は、下田の市民が彼女の犠牲を許さないであろうことを自覚していた。実際に、彼女は社会的に排斥され、自尊心を失った。お吉は領事への勤めを終えた後、鶴松と結婚したが、結婚生活に影が差した。その後、お吉は再び芸妓に戻り、絶望し、アルコール中毒となった。彼女の人生が破滅させられたことは当時の日本での女性の扱いの一例である。彼女は世を拗ねて生き、最終的には貧困で亡くなった (Yamamoto 1935: 83-247)。

3. ベルトルト・ブレヒトと彼の戯曲『下田のユディット』

ブレヒトは1940年9月、作家ヘラ・ヴォリョキから、山本有三の戯曲のグレン・ショウによる英語訳版を受け取った。1940年の夏ヘラ・ヴォリョキは、ナチス・ドイツから逃亡し、亡命地としてフィンランドを選んだブレヒトを自分の農家マルレベックに招待した。ヴォリョキは山本の戯曲の著作権を買い取っ

た (Neureuter 2007: 141)。

3.1 ベルトルト・ブレヒトの生涯と業績

ベルトルト・ブレヒトは1898年2月10日、アウクスブルクに生まれた。彼はミュンヘンで医学を学んだ。1924年、ブレヒトはベルリンに移った。1933年に彼はデンマークへ、1940年にフィンランドへ、そして1941年にアメリカへ移住した。1947年、ブレヒトはヨーロッパに戻り、最初はスイスに暮らした。1949年、ブレヒトは当時のドイツ民主共和国の東ベルリンへ移住した。彼は1956年8月14日、58歳の若さでベルリンで亡くなった。ブレヒトの初期の作品の中で、表現主義であり無政府主義である戯曲『バール』(1918年)と『夜の太鼓』(1919年)は特に重要であった。1928年の『三文オペラ』は大成功を収めた。亡命地で、ブレヒトの最も重要な作品に属すると思われる何部かの戯曲が作成された。その中には『ガリレイの生涯』(1938/39年)、『肝っ玉お母とその子供たち』(1939)、『セツァンの善人』(1942)と『コーカサスの白墨の輪』(1945)がある。

ブレヒトのスタイルと言葉づかいは、ヨーロッパの近代文学に大きな影響を与えた。彼の戯曲と叙情詩の中で社会的な批判と並び、人間に対する同情のようなモチーフも重要な役割を果たしている。1949年、彼は劇団ベルリナー・アンサンブルを結成した。ブレヒトの演出は世界的な名声を収めた (Brockhaus 1984: 43)。

3.2 ブレヒトの戯曲『下田のユディット』

レーゲンスブルク大学のドイツ現代文学教授ハンス・ペーター・ノイロイターは、ブレヒトの遺稿の中でブレヒト自身が正式に認可した『下田のユディット』の五つの場と、この戯曲についてのブレヒトの思想を示すメモを発見した。この遺稿に基づいて、ノイロイターはブレヒトの未完成の戯曲を作り上げた。2006年、この版はドイツのズールカムプ出版社により発表された (Brecht 2006)。

ブレヒトの『下田のユディット』は、本筋を包み込む枠の筋が付いている。枠の筋として序幕、10の幕間劇と幕切れ後に小劇が追加されている。

序幕は日本の首都にある宮殿の小さな講堂が舞台となっている。筆者がドイツ語から日本語に翻訳したこの序幕を以下に掲載する。

家長の政治家であり新聞編集者である秋村が、彼の客であるイギリスの東洋学者クライヴ、アメリカの女性ジャーナリストであるレイ、日本の詩人キトと

が話し合う間に、素早く優雅に「唐人お吉」の第一場の簡素な舞台装置が設置される（Brecht 2006: 13）。

以下の会話は筆者の訳による戯曲の導入部分である。

レイ：秋村さん、劇場に行くことができたんだけど。このために役者たちをお屋敷に呼ぶのは仰々しくて、費用がかさむよ！

秋村：役者たちはここの方がより居心地が良いと感じるはずだ。空気はもっと良くて、座席もより柔らかい。この戯曲は悲劇なので、それは重要な点になるよ。

キト：戯曲には英雄的な行為も登場する。座り心地の悪い席であれば、気分が悪くなってしまうよ。英雄の活動を見る際には、座り心地の良い席に座ったほうが良い。

クライヴ：いずれにせよ、私の小さな異議に対して、上演というこのような貴重な論拠を挙げさせるように挑発してしまったことを深く悔やんでいる。

秋村：我が国で愛国主義は、上層階級のみに関心事であると思い込ませておいてはいけない。

キト：クライヴさんが、お吉の神話のような神話は、結局あまり証拠として役に立たないという異議を唱えるのは不可能ではない。神話は神話だろう。

秋村：キトさん、この点では私の意見は違う。神話は証拠として役に立つ。特に新しい神話は。神話を生み出すような国家主義は、間違いなく民族的な国家主義だ。クライヴさんもそう思わないか？お吉の神話はまだ50年も経っていない。もう一つの重要な点がある。私があなたに上演させる場面は、現代的な戯曲からのものだ。この戯曲は山本氏が執筆したものだ。彼は我が国の最も新進気鋭の戯曲家の一人だが、彼の意見とは全く一致しない。彼は現実主義者だ。

キト：その通りだ。理想化された戯曲ではない。

レイ：あなたの日本のユディットを見ることをとても楽しみにしているわ。

キト：あなたは彼女を虎穴の中で見るができるよ。

クライヴ：その虎とは、あなたの同国人だ。

レイ：知っているわ。日本の地に足を踏み入れた初のアメリカの領事よね。

キト：新たなホロフェルネスのような人たちは、火器と剣よりも、むしろ通商条約を使って脅してくる。

レイ：それは火器と剣より破壊的ではないわけではないと耳にしたわ。

キト：この女を聖ヨーハンナのような人物として理解しても結構だ。彼女はいわば火あぶりの刑に処されたようなものなのだ。つまり、自らの同胞の被害者となる。

レイ：ちょっと、クライヴさん、私が分かるように全てを翻訳しないとだめよ。

秋村：役者たちは準備ができたはずだ。（ト書き：彼は拍手する。）座って下さい。（ト書き：舞台の前には小さな屏風が置かれていた。監督はその屏風の前に登場する。）

監督：皆さん、最初の下田の奉行所の中の場面をご覧下さい。そこでアメリカ人の領事と日本人の政治家たちとの歴史的な出合いを体験できます。1856年が舞台です（Brecht 2006: 13-15）。

ベルトルト・ブレヒトが執筆した10の幕間劇の例を挙げるため、筆者は4幕と5幕の間にある4番目の幕間劇をドイツ語から日本語に翻訳した。

この幕間劇は、アメリカの女性ジャーナリストであるレイ、日本人の詩人キトと、詩人であり政治家でもある秋村の会話である。

レイ：これらの世界を統治する人々が気まぐれな決断をくだすことほど、頭に来ることはないわ！まるで爆撃をするか、それともまずランチを楽しもうかとアメリカ人は迷っているみたい！

キト：いつもこんな些細なことによって運命が変わってしまうのなら、多くの国家は困ってしまうよ。

秋村：もちろん、そんなことには依存していないよ。これは顕微鏡の下で繰り広げられる大きな曲がり角の小さな不確かさにすぎないさ。あの1856年5月のある日に、我々のお吉が、一人の外国人に牛乳をコップ1杯差し出したか差し出していないかなんて、もちろん日本の発展には左右しなかったさ。ともかく、そんな小さな行いによって、大きな行いができたということさ。

レイ：一つのことは特に面白いと思ったわ。それはお吉が二つの革命を成し遂げたということね。彼女が白人、つまり一緒に時間を過ごせばおとしめられ、酩酊状態になった時だけ一緒にいることに耐えられる嫌らしいやつ所へ行っただのが一つ目。もう一つは、彼女が牛乳を差し出したということ。彼女がただの親切心、単に人間性、もしかしたら彼女がやれることを全部したことによって、この二つ目の革命が引き起

こされたのよ。

キト：うーん、お吉に対して何も悪口は言えない、全く何にも。(ト書き：監督が前方へ歩み出る：支配組頭の伊佐は、アメリカの領事と共に將軍に謁見する旅に出発する。お吉は下田の渡し船で戻ってくる)
(Brecht 2006: 47-48)。

この数年、ブレヒトの戯曲『下田のユディット』の様々な異なった上演を見ると、この戯曲の大きな潜在力が明らかになる。1997年12月20日、ベルリンアンサンブル劇場でブレヒトの『下田のユディット』の未完成の戯曲が初演された。イェルク・アウフェンアンガーとユディット・クッカルトの監督のもとに、ブレヒトの生誕100周年を機に、ブレヒトが草案した11の場面の中で、五つの場面が上演された。その時点で、ブレヒトの遺品の中で発見されていた。ハートムート・クルークはこの戯曲を「表現主義の娼婦オペラのようなもの」と見なしていた (Krug 2008)。このベルリンでの上演はあまり成功を収めなかった。2008年9月上旬のヘリベルト・ザッセ監督の指揮下によるヴィーンのヨーゼフシュタット劇場での上演はベルリンの上演より高く評された (Heine 2008)。

文学研究者ハンス・ペーター・ノイロイターは、ヘラ・ヴォリョキの遺品の中でフィンランド語の『下田のユディット』の完成版を発見した。ノイロイターはこのフィンランド語版をドイツ語に翻訳し、ドイツ語の未完成版と合体させた (Neureuter 2006)。2008年9月20日オスナブリュックの市劇場でホルガー・シュルツェ監督が演出した『下田のユディット』が上演された。

『下田のユディット』の上演に関する小冊子にこの上演についての小論が数点載っている。一つはユールゲン・ヒレスハイムの原本とその多様性についての論文であり (Hillesheim 2008: 24-28)、もう一つはペーター・ノイロイターによる被害者としての救世主であるユディットについての論文 (Neureuter 2008: 14-20) である。

ハイケ・オステンドルフは、裏切られた女性についての論文で、『下田のユディット』はブレヒトの業績において重要な役割を果たしていると究明している (Ostendorf 2008)。

2009年初頭、『下田のユディット』はドレスデンにあるドイツの最も歴史ある大学生劇場で上演された。ヨーロッパだけではなく、世界各国でも『下田のユディット』は興味を引いた。2010年4月30日、英語訳『下田のユディット』の初演は、パウル・ミトリー監督の下でホノルルのハワイ大学のケネディー劇場で行われた。ヨーゼフ・T・ロスミアレクは、“Judith a coup for UH, window into playwright” (ユディットの上演はハワイ大学において大成功 ―戯曲への入

門) という記事の中で、ハワイ大学のドイツ語・独文学のマルクス・ヴェッセンンドルフ教授の『下田のユディット』の英訳の初演について論じていた (Rozmiarek 2010)。この戯曲は国際ブレヒト協会のシンポジウムの時、上演された。

ロスミアレクによると、ブレヒトはナチス統治に対して嫌悪の念を抱きつつも、『下田のユディット』に基づいて社会的な英雄の複雑な特徴を示したかった (Rozmiarek 2010)。

日独交流150周年記念公式プログラムの一つとしてベルトルト・ブレヒト『下田のユディット』と山本有三『女人哀詞』にちなんだ“下田のお吉”は2011年4月21日から24日まで4回金沢大学でも上演された (<http://www.nichidoku.org/2011events.htm>)。それぞれの『下田のユディット』の演出が異なっていて、様々に解釈できることが明らかになる。

4. 山本とブレヒトの二つの戯曲の重要な登場人物

両方の戯曲は1856年から1876年までが舞台となっている。歴史的な背景も同じであり、主人公はアメリカの領事タウンセント・ハリスと芸妓お吉である。

4.1 領事タウンセント・ハリス

1854年3月31日、日米和親条約《神奈川条約》が締結された。この条約の第十一条には、両国政府のいずれかが、その取り決めに必要とみなす場合には、本条約調印の日より18ヶ月を経たのちに、合衆国政府はいつでも下田に駐在する領事または代理官を任命することができると定められている (Franz 2005: 78)。1855年4月29日、アメリカの大統領ピールスはこの条項に従って、タウンセント・ハリスを日本の滞在領事に任命した。1856年8月23日、領事ハリスは下田に到着した (Morris 2012: 5)。ハリスの領事としての所在地は改築された玉泉寺であった。彼はそこに1857年まで滞在していた。両国間の信頼関係は弱かったため、ハリスと日本人との日米通商条約についての交渉は困難を極め、長い時間が経っていた。日本人との交渉における遅延やいさかいは、ハリスに怒りを生じさせ胃病をもたらした。ハリスは日記の中で次のように書いている。

“I’ve never been so ill for seven years, as I am today; vomited a quantity of fresh blood” (ここ7年間、今のように病気であったことはなかった。大量の血を吐いた) (Cosenza 1959: 335)。ローベルト・シュレーダーによるとハリスとお吉は深い仲であったかどうかはよく議論されているが、判断が異なっている (Schröder 2002)。シュエットリーは2007年の論文の中で、お吉は召使としてハリスの所に派遣されただけだと書いている。しかし、彼女はハリスの帰

国後、侍妾の烙印を押された。シェットリーによると日本人側のお吉とハリスの異文化の出会いについての結論は以下のである。「お吉は自らを犠牲にしたか、あるいは野蛮人のために犠牲になったか」(Schoettli 2007)。

4.2 お吉

特に1959年にマリオ・E・コセンツァにより出版されたハリスの日記により1856年から1857年にかけての、ハリスとその日本における生活と活動についてはよく知られている(Cosenza 1959)。しかし、意外なことに、この日記ではお吉について一言も扱われていない。

お吉は恐らく1841年下田の船大工の娘として生まれた(一説には愛知県知多郡で生まれ、4歳の時移住とも)(竹岡範男2006:1)。彼女は役人の要請で、下田を救うためハリスのもとへ行った時、後に不道德な女性として見なされると自覚していた。

当時、外国人に関わった日本人の女性は社会から軽蔑されていた。ハリスと分かれた後、彼女は「唐人お吉」と呼ばれていた。そして、彼女は三島にも住んでいた。下田へ戻ってきた後、お吉は小料理屋「安直楼」を開業し、その2年後には廃業となった(八幡山宝福寺:2012)。彼女はアルコール中毒になり、1892年に51歳の若さで入水自殺した。現在、彼女は日本で尊敬されている。下田には唐人お吉の記念館もあり、毎年3月27日、下田のお吉ヶ淵と宝福寺で、開国史の悲劇のヒロイン・お吉の供養祭が開催される。お吉ヶ淵では、下田芸妓衆や観光関係者による献花が行なわれる(下田市観光協会:2012)。

お吉とハリスの関係は様々な研究者によって扱われているが、それぞれの描写は異なっている。ハンス・ヨーゼフ・オルタイルにとって、お吉は下田への砲撃を阻むため領事ハリスの館に派遣された芸妓である。ノルベルト・マイヤーは、お吉を1856年にアメリカの砲艦政策と日本の二重道德の被害者として描いている(Mayer 2008)。ハイケ・オステンドルフはお吉をすべての側の間に立つ英雄と呼んでいる。アルコールのため、輝きに満ちていた女性は廃人になった(Ostendorf 2008)。ハラルト・ラープはブレヒトの『下田のユディット』についての論文でお吉を「アメリカ人の売春婦」として描いている(Raab 2009)。フォルケル・ライヘルトさえも『下田のユディット』の内容を売春婦についての悲劇として描写している(Reichert 2009)。

5. 山本有三の戯曲『女人哀詞—唐人お吉ものがたり』とベルトルト・ブレヒトの戯曲『下田のユディット』の比較検討

アントニー・タローは、日本の戯曲がブレヒトの作品へ与えた影響を幅広

く扱っている。ブレヒトの戯曲『イエスマン』は、15世紀の金春禅竹の作と伝えられる謡曲『谷行』に基づいている。この戯曲の中心的なテーマは、個人が社会のために自らを犠牲にすべきかどうか、ということである。

能楽は、特に極端に様式化されていたために、ブレヒトにとって興味深いものであった。1930年の式典「ベルリンの新たな音楽」の機に、ブレヒトはクルト・ヴァイルとエリーザベト・ハウプトマンと共に「学校オペラ」の『イエスマン』を作成した。ブレヒトの教訓劇『処置』は、ハンス・アイスラーと共に行われた『イエスマン』の改作である。ブレヒトは能楽と歌舞伎から学んでいた (Tatlow 1977: 155)。タトローは、1977年に出版された著書の中では、ブレヒトの『下田のユディト』は扱っていない。彼はもちろんその当時、まだ2006年に出版されたノイロイターにより再編集された『下田のユディト』を知らなかったからである。

ウルリヒ・フォン・フェレルトも、1986年の著書 “China und Japan als Impuls und Exempel. Fernöstliche Ideen und Motive bei Alfred Döblin, Bertolt Brecht und Egon Erwin Kirsch” (刺激と模範としての中国と日本。アルフレート・デブリン、ベルトルト・ブレヒトとエゴン・エルヴィン・キルシュの作品における極東の思想と動機) の中ではまだ『下田のユディト』を取り扱っていない (Fellert 1986)。

しかし、日本文学がブレヒトの作品に与えた影響についての多くの思想を『下田のユディト』にも当てはめることができる。

岩淵達治は、2003年にハンス・ペーター・バイエルデルファーのために発表した記念刊行物の中で、『下田のユディト』の最初の五つの場面を扱ったが、2006年になって出版されたハンス・ペーター・ノイロイターの再編集された戯曲は、その当時まだ存在していなかった (Iwabuchi 2003)。ブレヒトが選んだ戯曲名『下田のユディト』だけを見ても、彼が、山本の戯曲に基づいて新たな戯曲を作成しようとしていたことが明らかになる。しかし、ブレヒトは自分の興味があることに重点を置いた。

ブレヒトの戯曲名は、旧約聖書のユディトとホロフェルネスについての物語から取られている。ユディトとホロフェルネスの物語は、2000年以上前の紀元前150年ごろに生まれた。ネブカドネザルの大将ホロフェルネスは、ユダヤ人のバビロン捕囚の時、ユダヤ人を絶滅させようとした。美しく敬虔な未亡人ユディトは、武装せずにホロフェルネスの陣営へ行った。ユダヤ人を救出するため、ユディトはそこでホロフェルネスの剣で彼の首をはねた。

カイ・ケーラーが述べているように、ブレヒトは旧約聖書の辛辣さを極東の穏やかさに置き換えた。ブレヒトの下田のユディト、つまりお吉には、タウン

セント・ハリスに対する攻撃性が欠けている (Köhler 2006)。

お吉とユディトの間には、様々な決定的な違いがある。お吉と違って、ユディトは自分の意思に基づき行動を起こす。ユディトはホロフェルネスの首をはねるため彼の陣営へ行くことを決断する (Neureuter 2008:14)。お吉と違って、ユディトは生涯に渡り、母国の国民から尊敬を集める。ユディトはユダヤのトーラ、つまりモーゼ五書の律法を守ったが、お吉は日本の法律に背いた。彼女は総領事ハリスの望みに従って、当時の日本では厳しく禁じられていた牛乳をハリスに差し出した。お吉を尊敬する人もいるが、外国人のための売春婦として嘲られることが大半である (Ostendorf 2008)。

ブレヒトはお吉に関して、特に愛国主義とその帰結に興味を持っていた。山本有三のお吉と同様に、ブレヒトのお吉も愛国主義者であるが、結果は全く異なる。『下田のユディト』の3分の2は、最終的に自殺に向うお吉にとっての不幸な帰結を扱っている (Köhler 2006)。ブレヒトは、第二次世界大戦とヒトラーの独裁政権の影響下で戯曲を書いていた。彼は他の戯曲でもくり返し、独裁者に対する抵抗は価値があるのか、また、のちにその抵抗はどんな帰結を生じさせるのかと疑問を呈した (Hillesheim 2008:28)。

ミッテルバイエリシェ・ツァイテュング紙の記事で、ハラルト・ラープは、山本有三が女性の権利のための先駆者としてのお吉の英雄性に焦点を置くのではなく、彼女が利用されたことを強調していると指摘している。母国のための奉仕が終わった後、彼女は愛国主義者としてではなく、浮気娘として扱われていた。最終的に彼女は落魄した (Raab 2009)。フォルカー・ライヘルトによると、山本有三は女性解放のための論告を書いたが、ブレヒトはイデオロギーを批判する寓話を執筆した (Reichert 2009)。ブレヒトにとってこの戯曲の意味は、お吉の英雄的な行為に対して報いを受けず、実際には愛国主義は決して割りが合わないということである。愛国主義は、愛国主義者にとって得にならない (Reichert 2009)。

山本有三の戯曲の中では、社会的にも人間的にもお吉が没落して行く各段階が描写されている。一方、ブレヒトはお吉についての戯曲に、本筋を包み込む枠の筋を付けた。この枠の筋において、お吉の実際の悲運が反映されている。山本と違ってブレヒトは、この戯曲に歌曲も組み込んだ。それらの歌曲は、筋の流れを中断させ、熟考させる役割も果たしている。

6. 結び

ベルトルト・ブレヒトの戯曲『下田のユディト』は、山本有三の戯曲に深く基づいている。英雄的精神と愛国主義、また特に英雄的精神の帰結において、

自らの思想を表明するため、ブレヒトはハリスとお吉についての物語を扱った。山本有三の戯曲『女人哀詞—唐人お吉ものがたり』のタイトルを『下田のユディト』に変名したことによって、ブレヒトが旧約聖書のユディトとホロフェルネスについての物語を極東の思想と繋いだことが明らかになる。『下田のユディト』は、ブレヒトの最も重要な戯曲の一つであるというわけではないが、多くのドイツ人はこの戯曲について議論した。山本有三とベルトルト・ブレヒトの戯曲において、ハリスとお吉の扱いは異なっているが、それらの戯曲は日本と西洋文化の相互理解に大きな貢献を果たしている。

参考文献

- Brecht, Bertolt (2006), *Die Judith von Shimoda*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.
- Brockhaus Lexikon dtv (1984), Wiesbaden.
- Cosenza, Mario E. (1959), *The Complete Journal of Townsend Harris - First American Consul and Minister to Japan, Rutland, Vermont and Tokyo*: Charles E. Tuttle Company.
- Franz, Edgar (2005), *Philipp Franz von Siebold and Russian Policy and Action on Opening Japan to the West in the Middle of the 19th Century*, München: Iudicium Verlag.
- 八幡山宝福寺 (2012) 唐人お吉について、<http://www.i-younet.ne.jp/~hofukuji/okiti01.html> (accessed 23 September 2012).
- Heine, Mattias (2008), *Wie neu ist dieses Brecht-Stück wirklich?* In: *Welt Online*. 8 September 2008. http://www.welt.de/welt_print/article2410637/Wie-neu-ist-dieses-Brecht-Stueck-wirklich.html (accessed 23 September 2012).
- Hillesheim, Jürgen (2008), *Ein Archetypus und seine Variationen* (pp. 24-28). In: Nickel-Dönicke, Patricia: *Die Judith von Shimoda von Bertolt Brecht* (Programmheft der Osnabrücker Aufführung), Osnabrück.
- Iwabuchi, Tatsuji (2003), *Die Judith von Shimoda - Brechts Bearbeitung eines modernen japanischen Dramas*. In: Keim, Katharina; Boenisch, Peter M., Robert Braunmüller (eds.): *Theater ohne Grenzen. Festschrift für Hans-Peter Bayerdörfer zum 65. Geburtstag*, München.
- Krug, Hartmut (2008), *Weder Entdeckung noch Gewinn*. In: *Deutschlandradio-Kultur*. 11 September 2008. <http://www.dradio.de/dkultur/sendungen/fazit/846124/> (accessed 23. September 2012).
- Köhler, Kai (2006), *Wer am Patriotismus verdient - Brechts Version einer*

- fernöstlichen Judith. In: Literaturkritik.de, Nr. 8, August 2006. http://www.literaturkritik.de/public/rezension.php?rez_id=9795&ausgabe=200608 (accessed 23 September 2012).
- Mayer, Norbert (2008), "Die Judith von Shimoda": Brechts besoffene Geschichte. <http://diepresse.com/home/kultur/news/413889> (accessed 23 September 2012).
- Morris, Roland Sletor (2012), Townsend Harris. A Chapter in American Diplomacy, New York: Japan Society Inc.
- Neureuter, Hans Peter (2006), Nachwort. In: Brecht, Bertolt (2006): Die Judith von Shimoda (pp. 129-158).
- Neureuter, Hans Peter (2007), Brecht in Finnland. Studien zu Leben und Werk 1940 - 1941, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Neureuter, Hans Peter (2008), Die Retterin Judith als Opfer (pp. 14-20). In: Nickel-Dönicke, Patricia: Die Judith von Shimoda von Bertolt Brecht (Programmheft der Osnabrücker Aufführung), Osnabrück.
- Ortheil, Hanns-Josef (2006), Brecht zum Lesen. In: Welt Online, <http://www.welt.de/print-welt/article235232/Taschenbuecher-Brecht-zum-Lesen.html> (accessed 20 September 2012).
- Ostendorf, Heiko (2008), Die verratene Frau. In: Das taz Print-Archiv, <http://www.taz.de/1/archiv/print-archiv/printressorts/digi-artikel/?ressort=ku&dig=2008%2F09%2F22%2Fa0165&cHash=fc9dd7f5d2> (accessed 23 September 2012).
- Raab, Harald (2009), Bertolt Brechts "Judith von Shimoda". In: Mittelbayerische. 3 February 2009. <http://www.mittelbayerische.de/index.cfm?pid=3090&pk=353372&p=1> (accessed 6 September 2012).
- Reichert, Folker (2009), Bertolt Brecht und die Judith von Shimoda - Eine tragische Heldin. In: Damals-Geschichte Online. <http://www.damals.de/de/16/Eine-tragische-Heldin.html?issue=189317&aid=189574&cp=1&action=showDetails> (accessed 6 September 2012).
- Rozmiarek, Joseph T. (2010), 'Judith' a coup for UH, window into playwright. 5 Mai, 2010. <http://the.honoluluadvertiser.com/article/2010/May/05/en/hawaii5050322.html> (assessed 6 September 2012).
- Schöttli, Urs (2007), Eine Inselnation als Meisterin der Anpassung. Ablehnung und Übernahme des Fremden in Japan. In: Neue Zürcher Zeitung. 14 November 2007. <http://www.nzz.ch/aktuell/startseite/eine-inselnation-als-meisterin-der-anpassung-1.584053> (accessed 6 September 2012).
- Schroeder, Robert (2002), Where the Barbarians First Landed. In: Time Magazine

Arts. Monday, Nov. 4, 2002. <http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,386980,00.html> (accessed 6 September 2012).

Shaw, Glenn W.(1957), Introduction, in: Yamamoto, Yuzo: Three Plays. Lord Dewa, Chink Okichi, Crown of Life, Tokyo: The Hokusaido Press, II-XVIII.

下田市観光協会 (2012), <http://www.shimoda-city.info/eve06.html> (accessed 6 September 2012).

竹岡範男(2006),『唐人お吉物語』東京：株式会社文芸社。

Tatlow, Antony (1977), The Mask of Evil. Brechts Response to the Poetry and Theater of China and Japan.

Tatlow, Antony (1998), Brechts Ostasien, Berlin: Parthas Verlag.

Yamamoto Yuzo (1957, first edition: 1935), Three Plays. Lord Dewa, Chink Okichi, Crown of Life, Tokyo: The Hokusaido Press.